D-5

ドイツ語の動詞及び前置詞句命令文に於ける主語と聞き手の同一性[1]

藤井俊吾（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC）
s.fujii0404@gmail.com

要旨

ドイツ語の動詞要素を含まない独立の構文として、主題項の特定の方向への移動を聞き手に命じる機能を持つ verbless directives (VD, Jacobs 2008)と呼ばれるものが存在する。VD は動詞命令文とは異なり主語（主題項）として指示対象に聞き手を含まない項が実現しうる点、及び主語が前置詞 *mit* “with”に支配される形ないし対格名詞句として実現する点が特徴的であり、類似の構文は Germanic や多くの Slavic にも見られる(Wilder 2008)。本発表は談話上の聞き手(HEARER)が左方領域に導入されるとする Speech Act Theory の枠組みを採用した上で、ドイツ語の VD の主語として聞き手以外の主題項が出現可能な原理を明らかにする。動詞命令文では常に high Mod (cf. Hacquard 2006)との一致を通して HEARER の参照情報の値が主語に共有されるのに対し、VD では否定詞の解釈不可能素性を消去する素性を有する high Mod が欠如しているために、否定詞が許容されず、また音形のある主語と HEARER の一致が起こらないと主張する。更に英語の動詞命令文の性質をもとに、英語の VD が否定詞を許容する原理も示す。

1. 導入

ドイツ語の非動詞構造の一つである verblose Direktiva “verbless directives” (VD, Jacobs 2008)は主題項の指示対象の特定の方向への移動を聞き手に命じる機能を有する。類似の構文は英語などの他の Germanic や多くの Slavic にも見られる(Wilder 2008)。以下はドイツ語の例である。

(1) a. Weg mit dem Krempel!
away with the.DAT junk.DAT
“Remove the junk!” (Jacobs 2008: 15)

b. Raus aus dem Bett (mit dir)!
R_out out the.DAT bed.DAT (with you.DAT)
“Wake up!”

c. Den Abfall schnell (raus) aus dem Zimmer!
the.ACC rubbish.ACC quickly (R_out) out the.DAT room.DAT
“Take the rubbish out of the room quickly!”

VD は方向を表わす前置詞句や副詞を中心に構成され、主題項が前置詞 *mit* “with”に支配される形もしくは対格名詞句として現れる点が特徴的である。Jacobs (2008)が指摘している通り、主題項を *mit* 節で表現する形は（ellipsis が可能な環境である）疑問に対する応答文や（動詞の省略が可能な）法助動詞の補部では用いることが出来ないため、VD は動詞文の省略形ではなく独立の構文であると考えられる。

(2) A: Wo hat er den Köter hingebracht?/ Was hat er mit dem Köter gemacht?
“Where did he take the cur?/ What did he do with the cur?”

B: *Raus mit ihm.

[1] 本研究は JSPS 科研費（課題番号：20J12480）による助成を受けている。

R_out with him.DAT
"(intended) He took it out." (Jacobs 2008: 24)

ドイツ語の動詞命令文では主語の指示対象が必ず聞き手に含まれるのに対し、VD では(1a)や(1c)のように聞き手以外が主語（主題項）として現れることが可能である。また主語が聞き手と同一指示になる(1b)の場合、動詞命令文同様、主語は代名詞としても音形のない項としても実現可能である。

(3) Mal mir (*du*) ein Bild!
draw.IMP.SG me.DAT (you.NOM) a.ACC picture.ACC
"Draw a picture for me!" (Wratil 2005: 233)

本発表ではドイツ語の動詞命令文及び VD の派生過程の分析を通して、VD の主語として聞き手以外を指す項が出現可能な原理を明らかにする。またドイツ語のそれとは異なり英語の VD で否定詞が許容される原理についても、英語の動詞命令文の振る舞いから説明を行う。

2. ドイツ語の命令文

2.1 動詞命令文

ドイツ語の動詞命令文で主語として顕在的に実現可能なのは 2 人称代名詞及び quantifier のみであり、英語とは異なりそれ以外の名詞は許容されない(Wratil 2005: 223)。いずれの場合でも主語は聞き手に含まれる。また quantifier 主語の場合、主語と同一指示の再帰代名詞や所有冠詞は必ず 3 人称で実現する。

(4) a. Mach sich$_i$ mal einer$_i$ locker!
make.IMP.SG himself.ACC MP one.NOM loose
"One of you loosen up!" (Wratil 2013: 138)

b. Mach einer$_i$ doch endlich seinen$_i$ Mund auf!
make.IMP.SG one.NOM MP at_last his.ACC mouth.ACC open
"One of you open your mouth!" (Wratil 2005: 225)

命令形の動詞は数の一致を呈する。主語の音形が実現しない場合、再帰代名詞は 2 人称で実現する。

(5) Benimm dich!/ Benimmt euch!
behave.IMP.SG youself.ACC.SG behave.IMP.PL yourselves.ACC.PL
"Behave yourself/ yourselves!"

ドイツ語の動詞命令文は否定詞を許容する。

(6) Geh nicht raus!
go.IMP.SG not R_out
"Don't get out!"

2.2 Verbless Directives

既に見たように VD の主題項（主語）は *mit* 節もしくは対格名詞句の形で実現し、聞き手に一致する場合にのみ音形の実現が任意である。また代名詞や *all* "all"以外の quantifier は対格名詞句としては実現出来ない。VD の聞き手は主語の指示対象に関わりなく当該の文で表現される事態の実現義務を負う。

(7) a. Raus (mit dir)!/ *Dich raus!
R_out (with you.DAT) you.ACC R_out
“Get out!”

b. Rauf damit!/ *{Das/ es} rauf!
R_out it_with {that.ACC/ it.ACC} R.on
“Put it there!”

(8) a. Rein ins Zimmer mit einem von euch!
R_in in_the.ACC with one.DAT of you.DAT
“One of you come into the room!”

b. *Einen (von euch) rein ins Zimmer!
one.ACC (of you.DAT) R_in in_the.ACC room.ACC

(9) a. Raus aus dem Zimmer mit allen!
R_out out the.DAT room.DAT with everyone.DAT
“Everyone get out!”

b. Alle raus aus dem Zimmer!
Everyone.ACC R_out out the.DAT room.DAT

VD は動詞命令文とは異なり少なくとも顕在的な形態的一致を呈さず、基本的に否定詞を許容しない。

(10) {*Nicht raus/ *Raus nicht} (mit dir)!
{not R_out R_out not} (with you.DAT)
“(intended) Don’t get out!”

(11) *Niemanden raus!/ *Raus mit niemandem!
nobody.ACC R_out R_out with nobody.ACC
“(intended) nobody get out!/ Don’t let anybody out!”

3. 命令文の聞き手と Speech Act Theory

Isac (2015)によれば命令形動詞を用いた命令文(true imperatives)とは異なり、subjunctive 等を用いた代替命令文(surrogate imperatives)では聞き手を含まない 3 人称主語が容認される。この場合命令文の聞き手は当該事態の実現義務を負う存在として機能するため、聞き手は主語とは別に存在すると推察される。

(12) Să plece mâine! (Rumanian)
SBJV.PRT leave.SBJV.3SG tomorrow
“Make sure he leaves tomorrow/ He should leave tomorrow!” (Isac 2015: 35)

Zanuttini (2008)及び Isac (2015)は聞き手が左方領域(cf. Rizzi 1997)に於いて統語的に導入されるとする立場をとる Speech Act Theory（Speas & Tenny 2003, Hill 2007, Ito & Mori 2016, Miyagawa 2017 及び伊藤 2019）の枠組みを採用し、命令文の分析を行った。それぞれ Jussive phrase 及び Speech Event Phrase の head が命令文の主格名詞句を認可していると分析しているが、本発表は主格名詞句が認可されない VD を分析対象に入れるため、Speech Act Theory の枠組みを踏襲した上で新たに分析を行う。尚、本発表では speech act Phrase (saP)の head が指定部に HEARER（聞き手）を導入する伊藤 (2019)の枠組みを用いる。

4. high Mod と命令形動詞及び否定詞間の Agree

本節では VD で否定詞が許容されない原理を説明する理論的前提を導入する。high Mod が聞き手志向の deontic modality 及び話し手志向の epistemic modality を司るとした Hacquard (2006)の分析に基づき、Isac (2015)は命令形動詞及び否定詞と high Mod 間の一致を想定した上で、形態音韻論的制約から特定の言語の true imperatives が否定詞を許容しない原理を説明した。尚、否定詞と high Mod 間での一致が存在する根拠の一つとして、Isac (2015)は直説法の動詞との組み合わせによって命令文が構成されるギリシア語の否定詞 *mi*(*n*)の存在を挙げている。

(13) a. Den grafis
NEG write.INDIC.2SG
"You are not writing."
b. Mi(n) grafis
NEG write.INDIC.2SG
"Don't write!" (Isac 2015: 113)

本発表は命令形動詞及び否定詞が持つ解釈不可能な Mod-feature が high Mod の持つ解釈可能なそれによって消去される必要があるとする Isac (2015)の立場を踏襲し、deontic modality を司る high Mod が義務を負わせる対象として HEARER と一致を行う想定をとる。また素性の解釈可能/不可能及び値のある/なしのそれぞれ 4 つの組み合わせを認め、一致の際に素性の値が共有される Pesetsky & Torrego (2007)の Feature Sharing Agree の枠組みを採用する。この枠組みでは値を有さない素性が probe として領域内の同じ素性を探査することで一致が生じ、主格の認可は T 素性の値の入力によって行われる。更にある素性同士が一致する際、当該の素性を有する語彙項目ないし機能範疇の別の素性同士が free ride で一致するが、人称や数などの同じスロットに別の値が入力されている場合や解釈不可能素性の値が合わなかった場合には一致が起こらないとする。

5. ドイツ語の命令文の派生

本発表では動詞命令文及び（特定の聞き手への命令を表現する）VD に T を認める立場をとる。また音形のない命令文の主語として PRO_{IMP} という語彙項目を設定し、これが常に聞き手を参照し、また命令文以外で出現しない原理を説明する。本分析は方向を表わす前置詞句が独自の左方領域を形成するとする Cinque and Rizzi (2010)の掲載論文や Noonan (2017)、藤井 (2020)の立場を採用し、P_{dir} を VD の主題項を導入する機能範疇として設定する[2]。更に否定詞を許容しないことを根拠に、（特定の聞き手に命令を行う）VD には high Mod が欠如しているとする想定を行う。VD では代名詞や *all* を除く quantifier が対格名詞句として実現しないため、VD には他動詞の Voice（ないし *v*）は想定しない[3]。

以下に命令文の分析に関わる各語彙項目及び機能範疇の素性を示す。i は解釈可能であることを、u は解釈不可能であることを示し、[ ]内に素性の値を示す。

---

[2] 仮に音形が実現しない動詞を中心に VD が構成されるとする Wilder (2008)や Müller (2011)、Fortmann (2018)の立場をとる場合には、P_{DIR} を音形のない動詞に置き換えれば同じ方向性の分析が可能である。

[3] VD の対格名詞句は左方領域の機能範疇が認可し、主題項を支配する *mit* は格の制約を突破するための last resort であるとするのが本発表の立場だが、これ以上は立ち入らない。

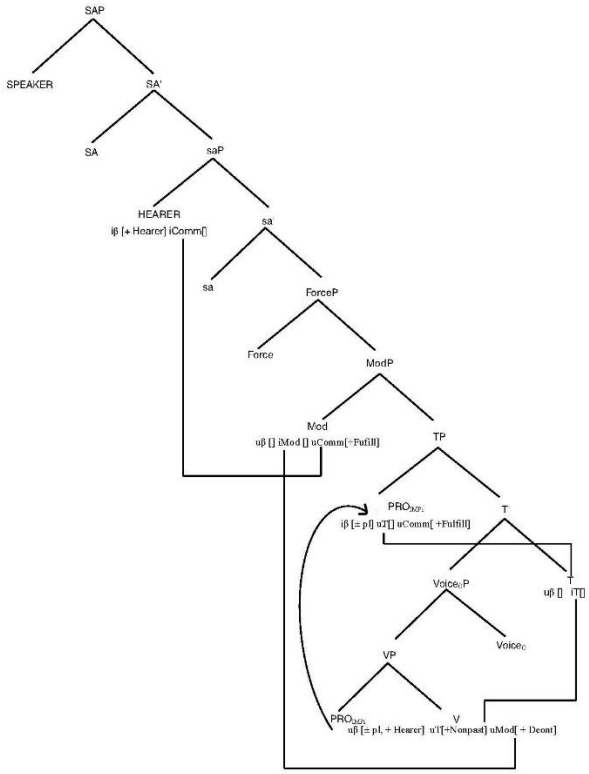
(14) 命令文の派生に関わる語彙項目及び機能範疇の素性

a.	2 人称代名詞：	iβ[+2, ±pl, +Hearer], uT[ ]
b.	quantifier 主語：	iβ[+3, ±pl], uT[ ]
c.	quantifier を除く 3 人称の名詞：	iβ[+3, ±pl, -Hearer], uT[ ]
d.	PRO_{IMP}:	iβ[±pl], uT [ ], uComm[+Cause]
e.	命令形の動詞(V)：	uβ[±pl, +Hearer], uT[+Nonpast], uMod[+Deont]
f.	P_{DIR}:	uβ[ ], uT[ ]
g.	T:	uβ[ ], iT[ ]
h.	high Mod:	uβ[ ], iMod[ ], uComm[+Fulfill]
i.	HEARER:	iβ[+Hearer], iComm[ ]

β 素性（φ 素性）は参照情報に関わる素性であり、+Hearer は聞き手を指す値、-Hearer は聞き手でないことを示す値である。T 素性は時制に関わる素性であり、+Nonpast は当該の事態が過去ではない時間に実現する/すべきことを示す値である。Comm 素性は義務に関わる素性であり、+Fulfill は事態実現に関する義務を示す値である。Mod 素性は modality に関わる素性であり、+Deont は deontic modality に関わる素性である。尚、β 素性の値の+2 と+Hearer が区別されるべき根拠として inclusive/ exclusive “we” を形態的に区別する言語が数多く存在することが挙げられる。

5.1 動詞命令文の派生

(15) PRO_{IMP} を主語とする動詞命令文の派生



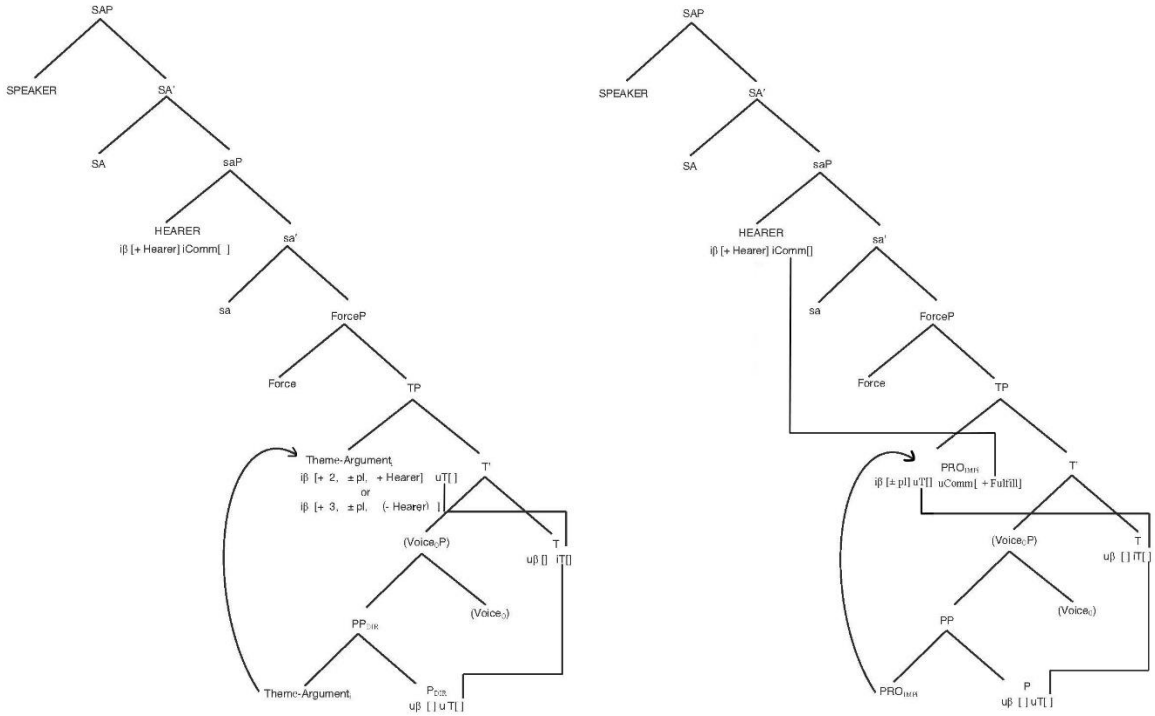
TP の派生が為される段階で V、主語名詞句及び T の間で T 素性の一致が起き、V 及び主語の解釈不可能な T 素性が消去される。同時に+Hearer を持つ 2 人称代名詞の場合は β 素性の一致が起きるが、他の主語では一致は起きず、V の解釈不可能素性 uβ[±pl, +Hearer]は消去されずに残る。次に high Mod が

派生に加わると、high Mod の iMod[ ]が V の解釈不可能素性 uMod[+Deont]と一致を行う。最後に指定部に HEARER を取る saP の派生が完了すると、HEARER の iComm[ ]が high Mod（及びこれと chain を結ぶ PRO_{IMP}）の解釈不可能素性 uComm[+Fulfill]と一致を行い、解釈不可能素性が消去される。これに伴い、quantifier 主語及び PRO_{IMP} に関しては HEARER の β 素性の値+Hearer が共有されるため、V の uβ[±pl, +Hearer]は問題なく消去される。これに対し、quantifier を除く 3 人称の名詞句は既に-Hearer を有しているために β 素性の一致が生じず、V の uβ[±pl, +Hearer]は消去されずに残り、結果として派生は破綻する。

以上の分析に基づけば、ドイツ語の動詞命令文では high Mod との一致を介して HEARER の β 素性の値+Hearer が必ず主語名詞句に共有されるため、主語は常に聞き手に含まれることが保証される。主語の制約についても V の解釈不可能素性から説明される。V は T 素性の値を有しているため、主語の主格が認可される予測となる。また PRO_{IMP} は一致を通して Comm 素性の値+Fulfill を HEARER に共有し、聞き手に事態実現の義務を負うことを強制するため、その実現が限られる予測となっている。

5.2 Verbless Directives の派生

(16) verbless directives の派生



TP が派生される段階で P_{DIR}、主題項及び T の間で T 素性及び β 素性の一致が生じ、それぞれの解釈不可能素性が消去される。但し、PRO_{IMP} の場合は uComm[+Fulfill]は消去されずに残っている。次に saP の指定部に HEARER が生成されると、PRO_{IMP} が主題項である場合は HEARER の iComm[ ]と PRO_{IMP} の uComm[+Fulfill]の間で一致が起こり、後者の解釈不可能素性が消去される。また同時に HEARER の β 素性の値+Hearer も共有されるため、PRO_{IMP} は聞き手を指すという分析になる。既に述べた通り、VD に high Mod は導入されないとする立場をとっているため、high Mod を介した主題項への HEARER の β 素性の値+Hearer の共有は起こらない。

以上の分析に基づけば、ドイツ語の VD には聞き手に含まれない主語が出現しうること、及び聞き手と一致する場合にのみ音形のない主語が許容されることが予測される。また VD の T 素性は値を持たないため、主格が認可されないことも予測される。

6. 英語の Verbless Directives

最後に (17)のように英語の VD が問題なく否定詞を許容する原理について説明を行う。本分析は Isac (2015)に基づき、英語の動詞命令文が surrogate imperatives であることに起因して、VD で否定詞が許容されていると主張する。Zanuttini (2008)が(18)などで示しているように、一般に英語の動詞命令文は聞き手に含まれない主語を取りうる。また、英語の命令形動詞は(19)のように subjunctive と同じ形態を取る。

(17) Not into the bucket with it! (Wilder 2008: 251)

(18) Your guards be the diversion while we sneak in! (Zanuttini 2008: 186)

(19) It's important that the flag *be* upright. (Isac 2015: 113)

本発表は英語の命令文の high Mod が HEARER と一致する素性 uComm[+Fulfill]を持たず、よって聞き手を含まない主語を許容すると分析する。そして英語の VD には動詞命令文と同じ high Mod が存在し、このために聞き手に含まれない主語（主題項）を取ることが可能ながら、否定詞が認可されると想定する。

7. 結論

本発表ではドイツ語の動詞命令文で統語上の聞き手(HEARER)と一致する素性を有する high Mod が派生に導入されることにより、常に主語の指示対象に聞き手が含まれることになる一方、VD では high Mod が欠如していることで否定詞が認可されず、また主語（主題項）として聞き手を指示対象に含まない項が許容されることを示した。また英語の動詞命令文の性質を根拠に、英語の VD が否定詞を許容するのは英語の命令文の high Mod が聞き手と一致する素性を持たないことに由来することを主張した。

参考文献

Cinque, G. & Rizzi, L. (Eds.) *Mapping Spatial PPs: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, Oxford: Oxford University Press/ Fortmann, C. (2018) Vermeintlich verblose Direktiva – stumme Prädikatsbildung in Wurzelstrukturen. Fuß, E. and Wöllstein A, (Eds.) *Grammatiktheorie und Grammatikographie (Reihe Studien zur deutschen Sprache - Forschungen des Instituts für deutsche Sprache SDS Bd 7)*, Tübingen: Narr Franke Attempo, 63–92/ 藤井, 俊吾 (2020)『PP と CP の並行性：shadow-P の語順と文ムード』森芳樹編「日本独文学会研究叢書」140, 30–42/ Hacquard, V. (2006) *Aspects of Modality*. Ph.D. thesis, MIT/ Hill, V. (2007) Vocatives and the pragmatics–syntax interface. *Lingua* 117(12), 2077–2105/ Isac, D. (2015) *The Morphosyntax of Imperatives*. Oxford: Oxford University Press/ 伊藤, 克将 (2019)「談話志向統語論によるドイツ語左方領域の研究」博士論文、東京大学/Ito, K. & Mori, Y. (2016) On the Semantic Representations of Speech Act Phrases. *XI Workshop on Formal Linguistics (WFL 11)*/ Jacobs, J. (2008) Wozu Konstruktionen?. *Linguistische Berichte* 213, 3–44/ Miyagawa, S. (2017) *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press/ Müller, G. (2011) Regeln oder Konstruktionen. Engelberg, S., Holler, A. and Proost, K. (Eds.) *Sprachliches Wissen zwischen Lexikon und Grammatik (Jahrbuch des Instituts für Deutsche Sprache 2010)*, Berlin/ Boston: De Gruyter, 211–250/ Noonan, M. (2017) Dutch and German R-pronoun: R you sure it's P-stranding? Newell, H., Noonan, M., Piggot G., and Travis, L. D. (Eds.): *The structure of words at the interface*, Oxford: Oxford University Press, 209–239/ Pesetsky, D. & Torrego, E. (2007) The Syntax of Valuation and the Interpretability of Features. Karimi, S., Samiian, V., Wilkins, W. K., (Eds.) *Phrasal and Clausal Architecture: Syntactic derivation and interpretation*, 262-294, Amsterdam: John Benjamins/ Rizzi, L. (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In Haegeman, L. (Eds.) *Elements of Grammar*, Dordrecht: Kluwer, 281-337/ Speas, P. & Tenny, C. (2003) Configurational properties of point of view roles. A. M. Di Sciullo (Ed.), *Asymmetry in Grammar*, Amsterdam: John Benjamins, 315–345/ Wilder, C. (2008) The PP-with-DP construction. Witkoś, J. & Fanselow, G. (Eds.) *Elements of Slavic and Germanic Grammars: A Comparative View*, 235–253, Frankfurt: Peter Lang/ Wratil, M. (2005). *Die Syntax des Imperativs: Eine strukturelle Analyse zum Westgermanischen und Romanischen*. Berlin: Akademie Verlag/ Wratil, M. (2013). Imperativsatz. Meibauer, J., Steinbach, M., and Altmann, H. (Eds.) *Satztypen des Deutschen*, Berlin/ Boston: de Gruyter/ Zanuttini, R. (2008) Encoding the addressee in the syntax: evidence from English imperative subjects. *Natural Language & Linguistic Theory 26*, 185-218